

vol.50-03 (通算 564号)

2020年6月号

やどかり

2020年6月15日発行
(毎月1回15日発行)1987年12月19日第三種郵便物認可
発行人 公益社団法人やどかりの里
代表者 土橋 敏孝

〒337-0043 さいたま市見沼区中川562

TEL 048-686-0494

FAX 048-747-7030

URL <https://www.yadokarinosato.org/>

定価 50円(含会費)



国連・国際障害者年とやどかりの里

「やどかりの里50周年」をさまざまな形でお伝えしていますが、今号では、少し目を外に転じてみましょう。やどかりの里が誕生した10年後に発足し、設立40周年を迎える団体があります。日本障害者協議会(JD)です。そのJDの前身は、国際障害者年日本推進協議会(以下、推進協)であり、国連・国際障害者年を日本で成功に導くために官民が協力して67団体が結集してできた団体です。国際障害者年(International Year of Disabled Persons, IYDP)は「完全参加と平等」をスローガンに国連で決議されましたが、日本国内でも大きな影響を及ぼしていきました。このIYDPの報道等を通して、障害のある人のことを知り、将来の進路としたというやどかりの里の職員もいます。障害者の施策を大きく前進させました。

この推進協がIYDPの事業の一環として、1981年に障害者ヨーロッパ研修ツアー(英国・スウェーデン・オランダ)を企画し、この研修ツアーに全国精神障害者家族連合会(全家連)の推薦を受けて、やどかりの里の創設に関わったメンバーの1人である宮千代芳子さんとやどかりの里の第1号の職員であった荒田稔さんが参加したのです。

宮千代さんは推進協の報告書に英国の雇用サービス局のリハビリテーションセンターについて報告しています。「ここには多種にわたる職種が準備されており、(中略)細かくトレーニングが分かれているのに驚きました。精神障害者にはストレスを少なくする作業がなされているとのことでしたが、偏見についてたずねたところ、やはりまだ一般社会に偏見があり、

仕事に就くにも困難があるということでした」と文章を寄せています。

1981年のやどかりの里は、中央競馬会の助成を受けて、プレハブの建物を取り壊し、木造2階建ての家を新築しました。財政問題は相変わらず大きな課題で、旅費の一部負担金44万円の捻出も厳しく、会員に向けて寄付のお願いをし、2人の派遣が実現したのです。

IYDPは、精神障害が他の障害との横並びになることを求めました。しかし、国連・障害者の十年(1983年)の始まった翌年に宇都宮病院事件(看護職員の暴行で患者2人が死亡する事件)が発覚します。この事件をきっかけに、精神科医や弁護士が国際世論に訴え、精神衛生法から精神保健法に改正されます(1987)。そして、やどかりの里の存続を可能にした精神障害者社会復帰施設が法定化されます。

国際障害者年では、障害理解を深めることを目的とし、精神障害へも言及しています。JDが誕生した1980年に国連で決議された国際障害者年行動計画には、「ある社会がその構成員のいくらかの人々を閉め出すような場合、それは弱くもろい社会」とあります。精神科病院に長期入院している人がいる社会は弱くてもろいとも指摘しているようです。

やどかりの里の50年、JDの40年……前進面を認めつつも、「弱くてもろい」社会は変わったのでしょうか。まだまだ道半ばです。COVID-19の感染拡大の中で、弱くてもろい社会の姿があります。この現実に向き合いつつ、JDの40年にエールを送り、ともに歩み続けていきたいものです。